功を励むべしとて諸軍を帥ひて滅を屠り諸邑を攻撃し敵
て敵たる者なかりけり頻りに郡邑を陷し勢ひ竹を破るが如
く其勇氣に怖れずと云ふ者なし爰に浮田中納言秀家ハ
小西攝津守行長と深く進むで朝鮮の地に入り先陣の誉
れをのみ心ざし血氣にはやりて深入り庇を外國にさ
らなば君の損失且我れまた彼れに恩を施し事數年を
経旁憐むべきの至りなり我も急に朝鮮へ押渡て行長と
救はんとあれど家臣共に牽ひ今宵ハ海上も穩なる船
を出させ給へとて云ふ是に於て秀家船奉行を呼び出
し今宵密に裝船せべし你等忍びて此旨を漕出べ

とて次第を定め湊を漕出べ折ふし順風吹出れば備前
の兵船共其夜の明方に釜山浦に著船し小西の家来此事
に城番を勤め居たるこのバ羅出て渡海の儀を賀し行長
の戦功の委細を語りたれば秀家大に感ず行長此度の忠
戦に類なし誰か是に及ぶべきの吾著陣の旨飛札を以て知
しむべしとて書翰を馳て渡海の旨を知らせんこのバ
行長秀家の書を得て斜ならず喜び寔に千騎万騎の力と
ハ加様のことを云ふなるべし其沈蔚山の君守李彦滅と云者也後
出て生捕ること程なく弥其氣色快然たれバ士卒も大に
力を得て一同に怡ひけり

朝鮮十七日（壬辰四月）早朝注進始て着（東萊郡水宮也）朴泓ゞ書状なる大臣請ひて李鎰と以て巡邊使（変る防の大将の号）と為て中路（漢城より慶尚道の街道）より下り成應吉を左防禦使（上に同ド）と為て左道より下り趙儆を右防禦使（上に同ド）と為て西路より下し劉克良を助防将（是ハ常に設け置く官にて鎮守を兼ぬ位階三品）として鳥嶺を守らし竹嶺（険隘之地）を守らしめ邊機を助防将として鳥嶺を守らし慶州の府尹（二品君仁恕と儒臣なりて前の江界の府使邊應星を慶尚道の府尹（諸軍官朝鮮式土を云）と自ら択むで赴うむこうる處に俄に釜山陥るとの急報又至るこの時釜山鎮ゝを受け人通じる支能ざるび朴泓ゞ注進状ゝ

但高きる登りて以て望めば赤旗釜山城中に満ちゝ兵ハ此を以ゝ城陥るゝを知るゝる由なり李鎰ハ京中の精兵三百名を率ゐ往んとて兵曹にて兵卒を選ゝる書案を視ゝるに皆閭閻市井の白徒その外役所ゝゝ小吏又儒官等半そ居なり時に臨ゝ現に其人数を召出し點閲ゝるに儒生ハ冠服を具へ及第を志ゝと見え試巻を持ち小吏ハ平頂巾を戴て自ら總て軍役を免れむゝを願ひ求る者庭上に充滞召具ふべき者ハ無りけり李鎰は王命を受ゝて三日を経めれども發足ゝ已夏を得ゞて李鎰ゝて先づ行ゝ別将俞沃ゝて後に

を兵卒を領して行むとなり又柳成龍を體察使（大臣の任変に依て設けたる官）として諸將を檢督せしむ成龍ハ金應南を以て副使とせむと請ひ又前の義州の牧使金汝岳を武畧ある人時に罪に坐して獄に繫がれしを救免を請てともに隨へり武士の裨將に堪ぶき者を募り八十餘人を得たり既にして急を告る支絡伏わり日本勢已に察陽太丘を過て竹嶺の下に近づくと聞えしかば柳成龍大に驚き金應南申砬二人に謂て敵軍深く入る支已に急なり將ようとすると若何せむと問ふに申砬云君ハ敵に遇ふとも戰ふべき者に非ず李鎰孤軍を以て進むと云へど後詰なし何ぞ一猛將を早く馳せ下し李鎰が策に應ぜざるべからずと云ふ申砬が意自ら行て李鎰に加勢せむと欲すると見えけるゆゑ成龍金應南と俱にこの趣を申入けさせ即申砬を都巡邊使（変に臨て設とする官なり）となし國王より寶劍を賜ひ李鎰以下命を用ひざる者ハ此劍を用ひよとなり申砬拝辞して賓廳（大臣列居の廣間也）に來り諸大臣に對面し階を下むとせしに頭上の紗帽（唐冠）忽ち落て地上に在りしを見る者色を失ひぬ扨出て龍仁縣に到てまづ注進狀の中に其名を署さしけるを皆人其心乱れたるかと疑へり

金誠一を慶尚道の右兵使とし尚州に到て敵軍已に境を犯すと聞き晝夜馳て本營（兵馬節度營所）に赴く時に敵軍已に金海を陷し兵を分て右道の諸邑を掠む金誠一兵を進めて敵軍に行逢ふ將士皆逃走らむと欲し誠一馬より下て胡床に踞して動こゝ軍官李宗仁と呼て云く汝ハ勇士なり敵を見て退くやと励しゝる折ふし敵兵金の類當てはゝ双を揮て突進む宗仁馳せ出て一箭に射殪けて敵軍引却きて敵て前まゝ誠一離散の人民を召あつめ郡縣に檄文を廻し互に勢を示れゝ率綴る計をし然る小國王ハ誠一の前に日本に使し歸て敵軍容易に至るまゝ

と云て人心を鮮め國支を誤たるを以て命あて義禁府（諸官の善惡罪科を糺明する役）を遣て拿て来らむ支將に行むとす測ることを監司（慶尚道の司大丘に居し金睟ハ誠一に辭捕つらる由を聞き路上に出て別れを惜む時誠一に氣慷慨して一語も已に事に及ふ支なく唯金睟に化し力を盡して敵を討む支のことを励しゝると軍吏これを見て歎して云我死とすると恤て唯國事のゝ憂ふ是真の忠臣なりと惜こけて誠一稷山に至るに國王の怒も霽れ且誠一に本道（慶尚道）の士民の心を得たるを知て命ずて其罪を赦し右道（慶尚右道）の招諭使（時に防禦の官職なり）道内

慶尚の人民を諭し兵を起して敵を討たしむ時に柳崇仁戰功有る故に等を超て兵使となし金知金功を以て慶尚左道の安集使（時に防禦の官職）とし時に監司金睟ハ右道慶尚に在けるに敵兵中路に横たはりて左道慶尚に便を通せざるけれは所守令皆官を弃て逃走し人民の心も解散せる由都へ聞えけり金功ハ榮川の人にて詳に本道慶尚の民情を知るゆゑを以て安集にぐーしてこれを遣し金功既に至て左道の人民始て都の令命を知て稍〻に還て集て榮川豊基の二邑ハ敵兵幸に至らず義兵を起せる者頗るこれ有りと聞えたり

慶尚道の巡察使（大丘に居る）金睟ハ敵の變を聞き即て方略に依て軍勢を分け諸邑に移文を廻し各手勢を引率便利に赴き處に屯し聚て以て京將の至るを待居たりしに聞慶以下の守令皆其軍を引率大丘に赴き川邊に野陣を張て巡邊使（李鎰）を待居たり既に數日を経て巡邊使未だ來らず敵軍漸く近づきけるに衆軍各驚き動き折から大雨に衣裳を濡し兵粮も継のざりしに夜に入まぎれ皆逃散て守令も悉く單騎にて奔て還て巡邊使聞慶に入けるに縣中已に空うして一人も見えねば自ら倉穀を出し平る所の軍人に粮餉を與へて行き過き咸昌に歴て尚州に至

アるゝゝ小牧使二金澥ハ邊使を出站ニ招待つと云ひ託て遁れて山中ニ入るゝゆゑ獨アル判官一道の上納物を支配し勘定とらゝる後五位権吉邑を守アル居たるアル李鎰兵卒のたゝを以て權吉と責めうれを庭ニ曳き出し斬らむと云ふ權吉悲〻告て自ら出て軍兵を招き来らむと願ひ夜ニ入りて村中を捜アル索め聖翊アるる數百人を得て帰アるゝ皆農民共ゝなり李鎰尚州ニ留まり倉をあけ糴を出し散民共を誘き出しけゝば山谷の中より〻〻出来アル又數百餘人集アるゝと倉卒組分て軍卒たれども一戦も堪づき者ハなるとけアる時ニ敵兵已ニ善山まで至れり其日の暮ニ開

寧縣の者来アて敵軍已ニ近しと云ふ李鎰以為衆を惑ハれと將ニうれを斬むとす其人呼きて云ふ願くハ姑く我を囚置き船早ゝ敵至らばハ其時殺さるゝ晩うれまゝと云ひるる是夜敵兵長川ニ屯し尚州を距る支二十里日本の二里なり然るふ李鎰ゝ軍ハ斥候も無く敵来しども知らず聖翊ゝでも李鎰ハ猶敵ハ来らぬと心得て彼の閑寧の者を獄ニ出し斬て以諸人の見せしめ〻せアル扱此ほど集め得たる處の民軍と京ゝアつれ来アるる將士を合せ僅ニ八九百人を州北の川邊ニ陣ね山ニ依て陣をアるる陣中ニ大將の旗と立李鎰ハ甲を被馬ニ大旗の

下に立従事官尹暹朴篪及び判官権吉汝介察訪駅馬等を領して總て駅所と支配に役位階六品金宗武等の五人皆馬より下りて李鎰が馬の後に ひうたち須く有りて人三五人有林木の間より出徘徊し眺望して臥すと諸人敵の候うと疑ひけれども閑寧の人は斬られたるを懲りて敢て告る者なし

扨て虜ふ城中尚州の城に數箇所炬を起て見えけり李鎰不審に思ひ軍官と一人物見に遣しけり軍官馬に跨り駅卒二人鞭を執らせ後くとして行きけるの敵先だつて槁の下に待伏せして鳥銃を以て軍官を馬より打墜し首を斬て去りける故朝鮮の軍勢望み見て氣を奪はれしに俄に敵

大に至りて鳥銃十餘挺を以てこれを打つ中る者皆斃る李鎰急に軍人を呼て射させけれども何れも數十歩にて矢墜て敵に中らん敵已に左右に備へをなけ旗幟を持せ後より取廻して圍み来る李鎰支の急なるふあふて馬を回し北に向ひて走りけれ共軍中大に乱れ我先にと逃げるが脱し得る者は幾ばくも無る間無き者は悉く敵の為に害せられる敵軍李鎰を追支急なりと李鎰馬を棄衣服を脱髪を乱し赤裸になりて走りけり聞慶に到て紙筆を求め急に飛札を馳て敗軍を注進し引退きて鳥嶺を守らんと欲せしかども申砬が忠州に在

由を聞き遂に忠州に趨り
都に入り右相右議政李陽元を守城の大将とし李戩邉彦琇を
京城左右の偉将とし高山君朴忠侃を京城の巡撿使とし
都城の修補を急命元と都元帥として漢江を守らしめ
げて時に李鎰が敗軍の注進已に至るにつけ人心洶々
として驚きあくまで国王も内々都を去らるの意有りとも
外庭にては知らざる理馬の官国王の馬役金應壽賞聽日
到る首相領議政と再語して立去るべき復来りて申し事
有る旨を覩る者らしを疑ふ蓋しこの時首相は司僕提調司僕寺は
總て馬車を司る武官の支配なるもの所なる提調は司僕寺第一の役人なるを兼ね故なり都

兼旨六兼旨とて六人有て王命を出納もする役也依て喉官と云位階三品李恒福はらしを悟
る掌の中に立馬永康門内と云六字を書て柳成龍に示し
国王の宗親閤門は城第一の門也内裏の外に聚り痛哭して城を棄る
事勿と云領府事国王の親族外戚の事を司る処敦寧府と云その第一の役人也金貴榮
尤も憤々として諸大臣と一同に固く京城を守らんと請
ふ国王は宗廟社稷此に在り予将に何くか適かんと
有りしかども諸人遂に退きぬ然れども京城を守る妓
は叶ふまじらで見えける先に京中の民及び公私の召仕
の賤き小使者の類翰官等迫り打ちみ拳て城堞を乗て守
らんとす城堞の數三萬餘なれども守る人數は僅に七千か

とそれもそうも烏合の寄合者なれば皆城を追て逃け散ぬ
づき心有て番兵の軍士ハ兵曹の属下の者共なれば下吏
と相與に奸をして賂を受け私に免し放つ者甚だ多く諸
官人もいかに去とは来ると云ふ吟味も無く急に除て皆
用ゆるなどのたびに軍法解け弛まる支此の如くに至り
同知事李德馨を遣して日本の軍中に使せしむ先に尚州
敗軍の時日本の通支景應舜と云者李鎰が軍中に在りしを
この敵軍に捕つ死せしこの人今日本の大将平行長より
平秀吉の書契及び禮曹に送る公文一通を應舜に授け送
り返し云ひ含めるハ最前東萊に在る時蔚山の郡守と

生捕て書契を傳送りしに今に至て返答なし郡守ハ即ち李彦誠
と云者なり日本の陣中より回て来て罪を得む事を畏れ
自ら逃け来るとして其書を隠して傳へ一に故に都にては
知らざるなり朝鮮若し和睦の意あらば李德馨を使すし忠州に
て我に會せしむべしとなり蓋し李德馨往年宣慰使日本
の使客のと為て倭使を接待せし故を以て行長對面せん
と云ひ送れて景應舜都に至て時ハ事急にして計の出
すべき所なくして此に因て兵勢の後む事し有らむうと
思ひしに李德馨に行むと請しゆゑ礼曹にて答書を裁
め德馨ハ景應舜を引きつれて出去て人に德馨ハ忠州に陷ると聞
き先應舜をして往て探らしめけるに應舜ハ敵將清正の
為に殺されしと德馨遂に中路より遂て平壌に到て其子細

と復命
しけり
熒惑星朝斗と犯し京畿江原黄海平安咸鏡等の兵を徴て
京師を援くしむ扨吏曹文選勲封等總て文学あり判書曹中つうるところの總司せ
第一之役人　李元翼を以て平安道の都巡察使とし知事崔興源
と黄海道の都巡察使とし皆即日に發足せしむ西
狩國王都を落ち西の方ゆの評議有るゆゑに元翼は曾
くと漳て西狩と云しせ
て安州の牧使と為り興源は黄海の監司と為り時皆恵
政有て民心の為めに喜び〳〵を以て國王の巡行に備へ
しむ

小西行長陷忠州之事

日本斯て小西攝津守行長軍士と昏議しけるは味方の軍
勢已に渡海して今明日の中に著陣あるべき由なればい
さ忠州を攻下し弥武勇を顕さん大閤の御感に預らんは
いふに異見と向ふ一統同意し急ぎ打立ん〳〵勝
む依て軍列を定め忠州に押寄る一説に小西行長忠州に到る時加藤清正黒田長政
鍋島直茂等忠州に到て會と云行長等丹月駅より路を分ち二手に成つ
て馳せ向ふ時に四月廿八日夜の丑の刻也彈琴臺の敵に
陣所に打寄て両方より鬨の聲を上喚き叫むで攻入た
り朝鮮勢は沼を阻て陣し只一筋の小道有て射手を
出して稠しく防ぎ戦ふ我智に兵士大石荒河双進むて